

道風

道風記念館だより 第63号

発行日
令和四年五月三十一日

編集・発行

春日井市道風記念館
春日井市松河戸町五―九―三
電話(〇五六八) 八二―六一〇

収蔵品紹介 西川春洞書幅

一幅・明治二〇年

西川春洞(一八四七―一九一五)は、肥前国唐津藩の藩医の家に生まれました。名は元讓、字は子謙、号は春洞。別号に如瓶人、大夢道人などがあります。

中沢雪城の門に入り、幕末の三筆に数えられる巻菱湖の書風を学びましたが、清国から文物が舶来するに及び、隸書、篆書に傾倒していきました。

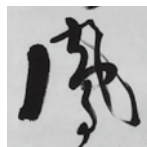
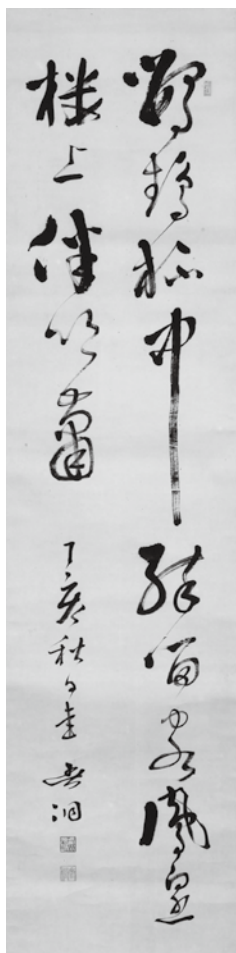
明治時代は日本書道史において大きな転換期です。ここで当時のようすについてふれておきます。明治一三年(一八八〇)、金石学にくわしい楊守敬が来日しました。

金石学とは、金属器や石碑などに残された古い文字を研究する学問です。楊守敬は来日に際して数多くの碑拓本を携えてきたので、それまで日本では目にするこ

拓本が伝わりました。その中でも衝撃的だったものが北魏の書(図1)です。その特徴的な書風を自らの書風に取り入れていった人物として日下部鳴鶴や巖谷一六らが挙げられます。特に鳴鶴は多くの門人を擁していたのでこの書風は瞬く間に全国へと広まっていきました。楊守敬の来日に先立って清国に渡り北魏の書などを直接目にした副島蒼海や北方心泉といった人物もありました。また、秋山白巖は渡清して徐三庚に師事し、その書や資料を日本へ持ち帰りました。

この作品は、「丁亥」の年紀から明治二〇年(一八八七)の作と知られます。図2「鳳」の第二画の転折部分に図1「因」と同じ特徴がみられ、当時、北魏風の書が日本でいかに流行していたかが窺えます。北魏風の書というと筆を強く押さえて点画を太くした力強い書風を想像しますが、この作品ではさりげないアクセントとして取り入れられています。北魏風の特徴的な転折の形状をつくるには速度をゆるめなければなりません。線の速度感には本作品の大きな魅力です。それを損なわないように細い線で表現し、運筆の速度感を基調とした作風になじむように書かれているのです。

徐三庚の書や古碑拓本を幅広く研究したのちの隸書、篆書作品に焦点があてられることが多いなかで、数え年四一歳のときの行草書作品として貴重な一作です。



鸚鵡杯中醉留客 鳳凰楼上伴吹簫 (戎昱「贈別張駙馬」より)

一三三三三×三三九mm

図1 北魏の書 牛橛造像記「因」

図2 「鳳」

中国古代の簡牘 3 韋編三絶

福田 哲之

中国の古典に由来する故事成語の中には、読書や書物にかかわるものが少なくありません。今回取り上げる「韋編三絶」もその一つです。ご存知の方もおられると思いますが、取りあえず、手元の『角川新字源改訂新版』（二〇一七年）から引用しておきましょう。

【韋編三絶】いく度も書物を読むたとえ。むかしの書物は竹のふだをなめしがわでとじた孔子は『易』を愛読して、そのとじたなめしがわが三度も切れたという故事による。
〔史記・孔子世家〕

末尾に示されているように、出典は、今からおよそ二千年前（前漢中期）に司馬遷が著した歴史書『史記』の孔子世家です。該当部分の現代語訳は以下のとおりです。

孔子は晩年になって『易（周易）』を愛好し、「象（繫辭）」「象」「説卦」「文言」などの解説書をつくった。（孔子は）『易』を何度も繰り返し読んだため、韋編（竹簡の綴じひも）が三度も切れたほどであった。（孔子は）言われた、「もしもわたしに数年（の寿命）があたえられ、このように（学び続けることが）できれば、私は『易』において文と質とを備えることができるだろう」と。

『史記』孔子世家は、現存する孔子の伝記として最古の資料ですが、孔子は司馬遷のおよそ四百年前（春秋時代後期）の人物であり、その中には、

史実とは異なる伝承が少なからず含まれているようです。引用の末尾に見える孔子の発言は、『論語』述而篇に類似した言葉が見え、「韋編三絶」の故事も、おそらく孔子の言葉から生まれた伝承と見なされます。ただし、歴史的な事実か否かという問題とは別に、このエピソードは、竹簡時代の書物の実態を伝える証言として、重要な意義をもっているのです。



図1 門弟に教える孔子（中国の記念切手）

中国において紙が書写材料として普及していくのは、後漢中期（二世紀）以降であり、それ以前の書物は、竹簡を右から順に並べて二箇所または三箇所をひもで綴じたものでした（図1）。何度も

繰り返し読んだために綴じひもが切れるという事態は、現在の書物では想像できません。「韋編三絶」の意味を理解する上で、ここがまず重要なポイントです。さらに注目したいのは「韋編」です。辞書を見ると「韋」は「なめしがわ」、「編」は「とじ」と。書物のとじひも」とあり、「韋編」を「なめし

がわの綴じひも」と解釈することに、まったく問題はないうように思われます。事実、私が確認した辞典類には、すべて同様の説明が見え、この解釈が通説となっていることがわかります。

ところが近年、「韋編」の「韋」は「なめしがわ」ではなく「よこいと」を意味する「緯」に通じ、「韋編」とはすなわち「緯編」で、竹簡を綴じた横ひもの意味である、との新説が出されました（林小安「『韋編三絶』正読」、『中国文物報』一九九一年十一月三日）。

林氏が、その根拠として引用する陳夢家『漢簡綴述』（由実物所見漢代簡冊制度）五、編聯）には、古代の書物の綴じひもの材料について、文献資料の中に絲（絹糸）あるいは絲繩（絹糸の繩）が用いられたとの記録が見えること、また漢代の実物資料として、麻繩で綴じられた簡冊が居延から出土していること、さらに武威から出土した簡冊の綴じひもはすでに朽ちて失われていたが、簡に残留したものを観察したところ、木簡には細い麻繩、竹簡には絹糸が用いられていたこと、などが記されています。

林氏の新説は、文献資料および実物資料と整合する、妥当性の高い解釈であると思われまます。しかし、なお通説の支持者からは、「韋」は文字どおり「なめしがわ」と理解すべきであり、孔子が読んだ『易』は通常とは異なる特装本で、頑丈な革ひもが三度も切れたからこそ、このようなエピソードが生まれたのだ、という反論も出てきそうです。

私は基本的に林氏の新説を支持する立場ですが、「韋」については、少し異なる考えをもっています。以下では、林氏の見解を踏まえつつ、さらに検討

を加えてみましょう。

まず綴じひもの素材という問題です。出土した竹簡を見ると、長さは書物によって異なりますが、一簡の幅は八ミリ前後、厚さは一ミリ弱でほぼ共通しています。この数値からもおわかりのように、竹簡は細長くかつきわめて薄く加工されているため、枚数が多くなっても比較的軽量であるという利点があります。一方、木簡は竹簡にくらべて頑丈ですが、竹簡のような加工は手間がかかるため、幅の広い板状にして、基本的に単独で使用されました。このように竹簡と木簡とは、それぞれの素材の特性に応じて使い分けられていたのです（連載第一回参照）。

ここであらためて注目されるのは、先に引用した陳夢家『漢簡綴述』に、武威漢簡の木簡には細い麻縄、竹簡には絹糸が用いられたとの指摘が見えることです。陳氏は麻縄で綴じられた居延漢簡の実例にも言及していますが、これらはいずれも木簡を編綴した例です。

一方、戦国時代の竹簡も絹糸で綴じられていたことが、上海博物館所蔵の戦国楚簡の分析から明らかになっています（『上海博物館藏戦国楚竹書（一）』序）。綴じひもはすでに朽ちて失われていましたが、竹簡が水分を含んで軟化したために、地層の重圧でその一部が竹肉に食い込んで残留し、材質が絹糸であったことが判明したのです（図2）。これらの実例から、竹簡には絹糸、木簡には麻縄と、簡の材質に応じて綴じひもの素材も異なっていたことがわかります。こうした状況を踏まえれば、いくら柔らかくなめしであったとしても、薄くデリケートな竹簡を革ひもで綴じたとの解釈は、やはり現実的ではないように思われます。

図2 竹簡に残留した綴じひも



次は「韋」字の解釈にかかわる問題です。先にもふれたように、辞書には「なめしがわ」と出ています。しかし「韋」はもともと別の意味でした。左の図をご覧ください。

① AOW ② 韋

①は「韋」の甲骨文、②は篆書です。両者を比べると現在の字形との関係がおわかりいただけると思います。①の真ん中にある「口」は聚落（城邑）の回りを囲む城壁を表していて、ちょうどドローンで上空から見おろしたようなイメージです。「口」の上下にあるのは人の「あし」（足跡）を象った「止」で、上の「あし」は城壁（口）の回りを左方向（左）に、下の「あし」は右方向（右）に「めぐりあるく」様子をあらわしています。つまり「韋」字はもともと「めぐる」という意味（本義）だったのです。

これに対して「なめしがわ」のほうは、もとは別の文字の意味であったのが、音の共通性によって「韋」字を本義とは異なる「なめしがわ」の意味（仮借義）で用いるようになり、やがてそれが定着したのです。

現在では本家本元の「韋」の本義はほとんど忘れ去られていますが、「韋」を構成要素とする分家の形声字のなかに、本義の残影を認めることができます。例えば、「韋」に「いとへん」を加

えた「緯」は、織物の「経」に「たていと」に対して、それをめぐる「よこいと」の意味をあらわします。また「韋」と「くにがまえ」からなる「圍」は現行の「囲」の本字で、まわりをめぐって「かこむ」という意味をあらわします。

それではあらためて「韋編三絶」について考えてみましょう。

「韋」は本義の「めぐる」、「編」は「綴じひも」で、「韋編」とは、縦に並んだ竹簡を「めぐる綴じひも」を意味したと解釈されます。あるいは収巻した簡冊のまわりをぐるりと「めぐる綴じひも」というイメージだったかもしれません。いずれにしても「韋編」は当時の一般的な綴じひものことであり、この故事成語の主眼は「三絶」のほうにあると見られます。

「三」には文字どおり「みたび」（三度）という意味と「しばしば」（再三）という意味があります。いくら竹簡の綴じひもが切れやすかったとしても、通常の読書ではそんなに何度も切れることはなかったでしょう。それが「しばしば切れた」というところに、晩年の孔子の『易』に対する愛好の深さを読み取ることができるのです。

（島根大学教授 ふくだ・てつゆき）

図版出典

図1 孔子生誕二千五百四十周年記念切手、一九八九年九月二十八日発行

図2 馬承源主編『上海博物館藏戦国楚竹書（八）』所収「志書乃言」第四簡（部分拡大）、上海古籍出版社、二〇一一年

令和3年度 事業報告

展覧会

■ 1階展示室

館蔵品展「書の魅力」

5月19日～7月11日

- ・様々な魅力をもつ館蔵の書作品を展示し、書の鑑賞方法を提案。
- ・学芸員による展示品解説 7月4日

企画展「おののとうふう

～和様の書のひみつ～

7月16日～9月5日

- ・子どもにもわかりやすく小野道風を紹介。
- ・ワークショップ「はじめてのふで」「秘密の特訓2・3年クラス」「秘密の特訓4～6年クラス」を実施。

【開館40周年記念事業】

特別展「書之美、書の価値～つたえるということ～」

9月14日～10月3日

- ・「つたえる」ということをテーマに、甲骨文等中国古代の文字資料、空海・小野道風・藤原佐理らの真筆など、貴重な書道関係資料を展示。
- ・記念講演会 10月2日
 - ①「書之美」、書の価値を考える」古谷稔氏
 - ②「中国における書文化の生成」福田哲之氏

【開館40周年記念事業】企画展「書のまち春日井」

10月8日～12月5日

- ・春日井はどのようにして「書のまち」になったのか。小野道風顕彰活動の軌跡を紹介。
- ・開館40周年記念式典
- ・記念講演会 10月23日 「書のまち春日井」中村立強氏

館蔵品展「文字の造形」

1月6日～3月6日

- ・様々な書体の作品、文字構成によって豊かな表情を加味した書作品を展示。
- ・学芸員による展示品解説 1月23日、2月20日

【開館40周年記念事業】「道風の書臨書優秀作品展」

1月12日～16日（文化フォーラム春日井）

- ・道風の書臨書作品展が40回を迎えたのを記念して、歴代の優秀作品を展示。

■ 2階展示室

【開館40周年記念事業】「私の好きな言葉」展

4月1日～令和4年5月8日

- ・好きな言葉を書いたハガキ書作品を年間とおして募集した。3月1日～5月8日は全作品を展示。

「第40回道風の書臨書作品展」

1月12日～23日

「第86回県下児童・生徒席上揮毫大会作品展」

2月4日～13日

講座

「書にふれる、はじめての講座」

4月～7月 4回（全6回のところ4回で中止）

- ・書にふれたことのない初心者向けの実技と鑑賞の講座。
- 講師 小川大樸氏、道風記念館学芸員

新型コロナウイルス感染拡大防止のための休館

- ・5月12日～6月21日
- ・8月31日～9月13日

第41回 道風の書臨書作品募集

道風記念館で開館当初から開催している公募展です。和様の書を創始した小野道風の偉大さを改めて考えていただくことを目的の一つとしており、小野道風の書だけでなく和様の書を継承し完成させた藤原佐理・藤原行成の書も課題の範囲としています。今回も奮ってご応募ください。

【この臨書展の特長】

- 出品料は無料です。入選作品は、当館で裏打ちして展示しますので、表装代もかかりません。
- 審査員は、当館顧問の古筆等研究家です。一般の部は、出品者名がわからない状態で厳正に審査が行われます。
- 審査の結果優秀に選考された作品は、記念館の収蔵品として保存します。

○ 臨書の対象 〈一般の部〉小野道風筆屏風土代・伝小野道風筆小島切

〈高校生の部〉小野道風筆屏風土代・伝小野道風筆継色紙

○ 賞 優秀・秀作・入選

○ 搬入締切 令和4年10月21日(金) 必着(送付可)

※課題の部分が決まっていますので、募集要項をご確認のうえご応募ください。

※出品には出品票が必要です。要項・出品票をホームページからダウンロードするか、道風記念館へご請求ください。

